

風"s・風のたよりオンライン版

2010/9/13 No.164

風のたより164号

9月26日（日）にインドのオーガニック・コットン生産者支援団体「アグロセル」よりサイレシュ・パテル氏を招いて講演会を開催します。



【日時】 2010年9月26日（日） 14:00～16:00

【会場】 [ウィルあいち（名古屋市東区上野杉町1）](#)

【会費】 1000円（当日1500円） 定員40名 要申込み

【申込】 申込は[こちらから](#)。

フェアトレードショップ風"s内

[名古屋をフェアトレード・タウンにしよう会](#)

土井ゆきこ

★ 風"sでは、只今「来て着てほしいオーガニックコットン」キャンペーンとして、季節にさきがけ、タートルネックをお買上げの方に、タンクトップ又はキャミソールを半額にて提供（在庫あるかぎり）。着たら手放せない気持ちよさを感じてください。講演会でのお話も是非聞いてくださいね。

■ インド 綿花ベルト 自殺急増 6年間で10万人

地元紙「ヒンドウスタン・タイムズ」は昨年（2006年）政府当局の統計などを基に1998年から2003年の6年間で全国で約10万人の農民が自殺したと報じた。最も多かったのは2002年の1万1971人で同年のインドの自殺者総数（約11万人）の18%にあたる。しかし「農民の自殺は実際はもっと多い」との声が各地ででている（中略）

地元の非政府組織（NGO）は、農政の失敗を非難されることを恐れ、当局が自殺を事故死や病死に見せかけて処理していると非難している。

■ マハシュトラ州東部カラング村

マハシュトラ州東部カラング村では20年ほど前から綿花栽培にDDTなどの殺虫剤や化学肥料が用いられるようになった。約10年目には「収穫が倍になる」との触れ込みで大手種苗メーカーが開発したハイブリッド種が導入された。種子や肥料を購入するために現金が不可欠になった。

■ インドの綿花栽培地帯は、「コットンベルト」から「自殺ベルト」へ

広大なインド亜大陸のほぼ中央に位置するグジャラート州からマディヤプラデシュ州、マハシュトラ州にまたがる綿花の栽培地帯は、インドの「コットンベルト」だ。

「何百年も続いた村の暮らしは、ほんの10年ですっかり破壊された。」自殺した村一番の旧家の当主シュリカット・シュプタ（47歳）の兄がつぶやいた。

■ かつては、綿花は「白いゴールド」

自国の繊維産業の原料とするため英国がインド木綿を買い付け、綿花は「白いゴールド」と呼ばれていた。比較的豊かな農業地帯だったコットンベルトは1990年代後半から「自殺ベルト」と呼ばれるようになった。

栽培コストの急上昇と、それに反比例するかのようになり綿花の国際価格が急落し、借金苦から自殺する農民が急増した。

「綿花の売り渡し価格は1994年には100キログラム2500ルピーだったが、今では（2007年）1800～1900ルピー。米国が自国の綿花農家に補助金を出して安価な綿花を大量生産させているから価格が下落した」と長老格のゴディさん（61歳）は訴えた。

*****以上2007年1月29日毎日新聞より*****

■ 化学肥料・農薬そして種子まで一手に販売する多国籍企業の大きな大きなアグリビジネスの犠牲に...

作られた貧困の一場面を見る気がします。かつては自然農法で作られていた綿花が、多国籍企業による種子・農薬・化学肥料など一手に支配され、途上国の農民に迫る凶を見るようです。

2002年6月の[「風のたより」70号](#)にあるように枯葉剤が除草剤になりました。ベトナム戦争終了後のことです。

多くの農民達は種苗を会社から買っていたために自家採取の種を失っていた上、農薬の

多用によって土壌は荒れ果て全てを失ってしまっていたのです。半年ごとに種と化学肥料を企業から買っていた農民達は、作付が悪いと借金を返すことができなくなります。

■ ハイブリッド種の導入により人工授粉→児童労働へ

2008年12月6日インドのコットン栽培と児童労働についての講演会ACEの話
[「風のたより」144号](#)より

コットンの人工授粉に40万人の子どもたちが働いている。

18歳未満の子どもの54%が14歳未満。その70～80%が女の子。ハイブリッドコットンは人工授粉をしなければならない。しかもいつとに、より多くの労働力が必要である。太陽が昇ったらすぐ、一つ一つ受粉させていく。

■ 受粉に携わる子どもの労働状況と教育のこと

①長期（2～3ヶ月）は住み込み、10時～夕方6時、夜も9時まで屋内作業。月2000ルピー（5000円）、昼の1時間休憩。2～3ヶ月休み無し。

②日雇いの場合は、日給50～100ルピー（125～250円）

③家業として手伝う子どももいる

女の子は畑労働の他に、家での仕事もある。

12歳の男の子の話では、75km離れたところから住み込みできて、風呂は4日に1回、農薬散布の時もそこで仕事をしていたと言う。病気の時も薬を飲み畑に出た。

農繁期は学校へ行っても休むことが多い。村の教育環境が未整備ということもあり、親の教育に関する意識が低い。1500人いる村で1～5年の小学校が140人在籍。教科書・授業料はいらないけれど、ノート鉛筆は親持ち。農薬の入っていた袋が、カバンになっている場合もある。親の借金のため働く子も多い。

また教育を受けていないために経済観念もなく、政府から3万ルピー借り、10万ルピーの家を建てた人が7万ルピー親戚から借りているという。

■ アグロセルのジン工場で出会った女の子、自信に満ちた輝く顔がそこに...

一般に女の子は、話かけたりするとはずかしがったり、隠れて顔を見せない。結婚したら特に夫以外には顔を見せてはいけない習慣もあり家からでない。

しかし、アグロセルのジン工場で出会った女の子は、どうどうと挨拶し、自信にみちた笑顔でポーズすら撮ってくれた。ホントに素敵な笑顔で。コットン農家の親に教育のことを尋ねると、「学校へ行くのがあたりまえでしょ」という答えが返ってくる。教育を受けると受けないとの違いが感じられる。ここでのコットン農家の親は教育への関心は

高い。

また実際識字率も平均で70%（男子81%・女子59%）、子どもの多くは1～7年までの学校に通い、遠い場合は寄宿学校もある。塾の活用、質の良い私立学校もある。 Cottonの栽培の繁忙期には通学前や授業後に手伝っている。 Cotton栽培の仕事で学校を休む事はない。（「風のたより」144号引用ここまで）

■ オーガニック栽培に転換した現地の変化や、フェアトレードがもたらす変化

環境問題への関心が高まりオーガニック・ Cottonの普及が少しずつ広まる中、オーガニックかつフェアトレードの Cottonが果たす役割について考えます。

■ 生産者団体「アグロセル」について

「アグロセル」は、社会的に立場の弱い小規模農家を支援するインドのオーガニック・ Cotton生産者支援組織で、ピープル・ツリーにオーガニック・ Cottonの原綿を届けてくれています。インド全域11州に25のサービスセンターを持ち、約4万5000人の小規模農家を支援しています。

アグロセルの生産者支援は、農業投入物の流通・販売から、生産物のマーケティング支援をはじめとする無料の農業技術指導や、土地を持たない人びとへの雇用創出プログラムの運営まで、幅広くかつ包括的に提供されています。

また、個々のオーガニック・ Cotton生産農家を支援するだけでなく、学校の水道設備の建設、女性が収入を得るためのプログラムも実施し、コミュニティ発展の支援も行っています。また、フェアトレードの普及活動にも熱心に取り組み、さらに多くの小規模農家を支援できるよう活動の幅を広げています。

アグロセルはインドの Cotton農家に農薬や化学肥料を使わない有機農法を提示し、スムーズに移行できるよう支援しています。また、アグロセルは害虫駆除のための自然農法や天然殺虫剤を開発しました。農家は高価で有害な化学薬品のかわりに、チリやガーリック、石鹼を使用しています。これは1エーカー当たり最大3000ルピーの節約になります。

電子メール : huzu@huzu.jp

ウェブページ : <http://www.huzu.jp/>

風の交差点 風"s